母親の自尊感情からみた親子関係の質に関する研究

― 愛着の形成に焦点を当てて ―

田所　摂寿・大塚　　周

要約

本研究では、愛着の形成に焦点をおいて親子関係の質に関して明らかにすることを目的に母親を対象に調査を行った。分析の対象者は118名(女性のみ)、平均年齢36.97歳であった。田邊・米澤(2009)が作成した「あるがままの子どもとの関係についての尺度」を参考に、親子関係に関する質問項目を新たに作成し因子分析を行ったところ、「愛着の未形成」、「母子間の葛藤」、「安定した母子関係」の３因子が抽出された。これらの因子とRosenberg(1965)の自尊感情尺度の関係について分析を行った。分析の結果、配偶者の有無により自尊感情得点に有意な差が見られた。同様に配偶者の有無により「愛着の未形成」、「安定した母子関係」に有意な差がみられた。さらに母親の自尊感情得点によりG-P分析を行ったところ、３因子共に有意な差が見られた。本研究の結果、配偶者の有無という養育環境は母子関係の質に関して影響しており、配偶者がいる方が望ましい母子関係にあることが明らかになった。さらに母親の自尊感情が高いほど母子関係に良好な影響を与えていることが明らかになった。

Keywords：愛着の形成，自尊感情，親子関係の質，母親，家庭環境

【問題】

近年、価値観の違いや夫婦間不和等、両親の様々な問題に生まれたばかりの乳幼児や、児童期の子どもが板挟みとなっている現状が多く存在する。そして現在、そうした理由から離婚を選択する夫婦は多く、離婚を考えている両親の子どもの多くは、自らの中に何らかの葛藤を抱えている。また、近年の社会環境の目まぐるしい変化の中で、親と子の在り方についての問題が改めて注目されている。人間が成長していく上で、他者への信頼を築いていくための極めて重要な発達段階において、親と子どもが、どのように接していくことが適切で、より応答的であるのかについて理解を深める必要性がある。

愛着(attachment)とは、子どもと養育者との間に形成される、深く且つ持続的な情愛の絆である。その元々の意味は、子どもが不安に駆られたときに、養育者に対して特異的な反応を示す現象である。つまり、それは、子どもにとっての安全基地であり、心及び身体の安定を取り戻

すことのできる世界である。子どもは養育者との愛着関係があるからこそ、安心して外界へと踏み出すことができる。言い換えるならば、愛着関係は、子どもの成長過程における人格形成の核となるものである。

愛着を形成する上で、子どもは、欲求不満と充足の繰り返し、さらには愛着者不在の緊張状態と、愛着者と共に過ごすリラックス状態との繰り返しによって、徐々に愛着者のイメージが心の中に保持され、内在化される。この愛着の形成が、ある要因によって妨げられた場合、人格形成の基盤において適切な人間関係を築く能力に障害が生じ、その一部が反応性愛着障害となる。この障害が子どもに与える影響としては、心身発達の著しい遅れ、免疫機能の低下等、その影響は非常に重篤なものである。つまり、母親が子どもとどのような関係を結んできたのか、母親はどのような養育態度で子どもと接してきたのかということが、その人間の基礎となるといっても過言ではない。

Prior & Glaser(2006)によれば、精神分析の諸理論において、人は愛着対象と自身の関係スタイルを基盤に、新たに遭遇する他者の振る舞いを予測及び解釈をし、自分自身の行動をプランニングするとされている。その結果、愛着対象と自身との関係に近似したスタイルが再生されることになり、さらにそれを通してまた、人はその内的作業モデルを強固にしていくことになる。Bowlbyの内的作業モデルによると、養育者との愛着関係を持つことが出来なかった子どもは、一時的な認知・情緒的葛藤だけでなく、長期にわたる対人的不適応状態を引き起こすことがあるとされ、その子ども自身が養育者の立場となったとき、その子どもに対する虐待等の障害を引き起こす背景となると考えられる。つまり、世代を通して愛着関係が連鎖していく恐れがあるのである。

【目的】

(1) 自尊感情の定義

近年、社会環境が目まぐるしく変化を繰り返し、母親と子どもを取り巻く問題が、あらためて注目をされている。親子間で内面を語り合う習慣が比較的乏しい日本では、心の悩みや葛藤が整理されることなく、子ども自身の中で押し殺されていることも多く、そうした状態が引き起こす問題の事態は切迫している。古荘(2009)によれば、「子どもの心の問題の背景には自尊感情の低下が存在する」と述べているが、その定義においては多くの研究者によって、異なる観点から捉えられている。

自尊感情とは、セルフ・エスティーム(self-esteem)の訳語であり、『心理学辞典』(中島ら，1999)によると「自己に対する評価感情で、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚」と説明されている。しかし、最近では、その言葉の意味を自己肯定感と訳す場合も多く、自尊感情という言葉の心性は否定的な意味合いに解釈されている。その理由について、

産経新聞(2009)は「自己を尊敬する、自らを尊大にかまえるという言葉それ自体と、謙虚さや控えめを良いとする日本の文化の関係性が一因している」と指摘する。しかし、中間・小塩(2007)は「自らを尊重すること、尊厳に感じることそれ自体は、決して否定的なことではない」と述べ、さらに「我々が生きていく上で大切な心理的基盤となるような自尊感情とは、他者の尊重をけっして犠牲にしないものである」と説明している。つまり、安定した自尊感情は、その個人の自信となり、他者の価値を尊重することにも繋がり、自己に対しても、他者に対しても受容的で在れると考えることができる。さらに、これらのことからも、自尊感情はその個人の精神的健康の基盤をなすであろうと推察される。

人間は生まれると、養育者との愛着関係を築きながら成長し、自らを形成していく。そして、それを通し、様々な対人関係を築き上げていく。したがって、子どもが母親から与えられる影響は大きく、母親の養育観や子育てが、子どもの人格形成や自尊感情の形成に関係していることが考えられる。加藤・中島(2011)によれば「現代の子どもたちの育つ環境が、子どもの心の居場所になり得ていないということが、自尊感情の低下につながっている」と述べており、自尊感情とは自分自身の存在や、生に対する揺るぎない安心感を得ることによって育まれる感情であると説明している。自尊感情の定義として近藤(2011)は、「自分自身を価値あるものと思う感情で、人が健やかに心の成長を遂げるために必要な感情」と説明しており、さらに親子間では、自尊感情の中でも、特に基本的自尊感情が大切であるとし、「親の絶対的で無条件な愛によって、子どもは、愛される自分、存在していい自分を見出す」と述べている。つまり、子どもは、母親との共有体験により、いくつもの感情の交流が生まれ、自分自身に芽生えた感情を肯定的なものとして、やがて、有りのままの自分を「これでよい」とする強い基本的自尊感情を築き上げていくのである。さらに、菅(2010)は「親が子どもに与えることのできる最高の贈り物は、無条件の肯定的な自己像を育むことである」と述べており、子どもが基本的自尊感情を育むためには、母親の受容的な態度が絶対的必要条件であると考えられる。

また、近代社会における子育てには、母親の養育観や子育て、考えについて共感をし、安定した親子関係を持てるための支援者の存在が求められており、その価値は非常に高いと考えられる。田邊・米澤(2009)によれば「第三者が母親に関わることは、自分の母親像が変わったり、子どもへの思いが変化したりと、親子の関係性が成長する大切な要因となる」と指摘しており、母親の子育てに対する考えを受容し、それら及び精神的側面をサポートする者の存在の重要さを示唆している。

先にも述べたが、子どもの自尊感情の低下が引き起こす問題の事態は切迫して

おり、早急な対応が望まれている。その解消には、子どもに対し、受容的で、なにより応答的な母親の存在が必要不可欠である。つまり、母親は子どもにとって心及び身体の安定を取り戻す安全基地となる環境でなくてはならない。母親の自尊感情は、子どもが人格を形成していく過程において、さらには自尊感情を形成していく上で、非常に密接な関わりを持っていると考えることができる。

(2) 母親の自尊感情と子どもとの関連

少子化問題や核家族化問題、経済成長率の低下等といった社会環境の変化が目まぐるしい現代を生き、子育てをする母親は、子どもの悩みや葛藤に向き合う余裕がなく、結果として、子育て及び自分自身に対し、自信を喪失してしまう事例が多く存在する。母親と子どもの在り方や関係性について、古荘(2009)は「周囲が期待するような子どもに育てなければ親の責任であるという風に、親を責め立てる傾向」があると指摘しており、息が詰まるような閉塞型社会の中で、自分自身を守ることで精一杯であるという現状が存在している。こうした母親自身の自尊感情の低さが、子どもにも投影されることが、子ども自身の自尊感情の低下につながっていることが考えられる。言い換えるならば、母親の自尊感情と子どもの自尊感情の関連性は高く、非常に密接な関わりを持っているといえる。

田邊・米澤(2009)による調査では、母親が自分自身の有るがままの姿を受け入れ、自信を持つことができていると、自分自身の子どもとの関係においてもポジティブな関わりの影響を受けていることが証明され、母親自身の自尊感情が子どもとの肯定的で安定した愛着形成に寄与していることが述べられている。さらに、加藤・中島(2011)による調査では、自尊感情と養育態度の関係から、自尊感情が高い親ほど、好ましい養育態度であり、さらには、それが子どもの自尊感情の形成にも影響を与えることが示唆された。また、自尊感情の高い母親は、子どもと共に活動することに対して積極的であり、自尊感情の低い母親は、子どもとの関わりに対してあまり好意的でないことが認められた。根本(2007)によると「子どもは自分といることを喜ぶ親を見て、自分の存在価値を実感する」と述べており、母親が子どもとの時間を大切に思うことこそが、子どもの自尊感情を育むことにもつながると考えられる。また、母親側に視点を当てて考えるのではなく、子ども側の視点から捉えた季(2006)による調査でも、アタッチメント表象と自尊感情の間において、Bowlbyのアタッチメント表象と自己との関係性に対する仮説的な主張を支持する有効な関係性が確認された。すなわち、親に対する愛着安定性の高い群は、愛着安定性の低い群と比して、自尊感情が高く、親への愛着表象と自尊感情との間に有意な補完的関係が認められた。

先にも述べたが、母子関係において、母親の自尊感情と子どもの自尊感情の関

連性は高く、非常に密接であると考えられる。母親の揺るぎない愛情を得ることによって、子どもは自らを肯定していくことができる。そのために、まずは、母親自身の自尊感情のレベルがとても大切であると考えられる。

(3) 家庭環境から見た子どもの愛着形成

わが国における2012年の離婚率は、1960年代後期から比べると約２倍にもなっている(厚生労働省，2012)。これは、確実に漸増傾向を示しており、日本が抱えている大きな課題の１つであると言える。離婚を選択した両親の子どもの多くは、非離別家庭の子どもと比して、自らの中に悩みや葛藤を抱えているケースが多い。また、母親自身も離婚後、子育てに関する精神的葛藤や経済的困難等といった悩みを抱え、それが自尊感情の低下につながっている事例も少なからず存在する。

愛着対象者として典型的に想定されるのは、母親であり父親である。愛着理論によると、子どもが安定した愛着を形成する上では、愛着対象者が、子どもの生活の中における存在として持続性及び一貫性があることが絶対的必要条件とされている。初塚(2010)によれば「アタッチメント対象が母親一人である場合には、母親との分離や、母親の養育の質の低下が、即、子どもの発達へのマイナスの影響を意味することになる」と指摘しており、子どもにとって母親だけでなく、母親以外の者が安全基地として存在していることが、子どもの発達にとって重要であると考えられる。またLamb(1979)による父子関係の研究においては、「幼児の愛着形成という点では、父親は母親と同等の影響を及ぼしていることを指し示しており、質的な関わり、特に情緒的な関わりにおいては、母親を凌駕する面もある」と述べている。さらに、Amato(1994)による「離別家庭の子ども」と「非離別家庭の子ども」の適応の比較研究では、離別家庭の子どもは、非離別家庭の子どもに比して、平均的に言えば、より多くの問題を抱えており、そのwell-being（幸福状態）は低いという結果が出ている。また、棚瀬(2004)による「離婚の子どもに与える影響」における事例研究では、子どもにとって両親の離婚は、その後の長期に渡る対人的不適応状態に陥ることが示唆された。さらに、棚瀬(2009)は「子どもにとって、親と強い愛着関係を形成することが、生涯にわたる基本的信頼感を持つようになる上で決定的に重要であり、何らかの形で子どもが愛着対象から切り離される場合に、子どもは強い不安を感じ、それがトラウマ体験となる」と指摘した。また、父子関係についても言及をしており「愛着は、まず、第一次養育者との間に形成されるが、父親との間にも、子どもの発達段階に応じて同じように形成される。子どもは両方の親に強い愛着を持つようになるのである」とも述べている。

先にも述べたが、両親の離婚という選択に子どもが板挟みとなっている現状が存在し、子どもが、自らの中に何らかの葛藤を抱えているケースがある。家庭環

境から見た愛着形成については多くの研究者が、子どもの発達段階及び愛着形成において、母親と父親の両方が存在していることが望まれると指摘しており、父親との間にも、母親と同様の愛着を形成すると述べている。

(5) 本研究における仮説

本研究では「家庭環境から見た愛着形成について」、「母親の自尊感情と子どもとの関連について」という２つの観点から検討を行う。先行研究では、母親が在るがままの自分を受け入れている場合、つまり自尊感情が高い母親は、自尊感情の低い母親と比して、子どもの自尊感情の形成にも正の影響を与え、さらには肯定的で安定性の高い愛着形成に寄与すると考えられる。現代の日本において、子どもは、多くの時間を父親よりも母親と過ごすことから、子どもが母親から与えられる影響は大きく、母親の養育が子どもの人格形成に深く関与していることが考えられる。さらに、友利ら(2004)によれば「子どもは親の自尊感情のレベルを模倣する」と述べており、それらの相関関係についても言及をしている。また、家庭環境から見た愛着形成という点では、母親と父親は同等の影響を及ぼしていることが示唆され、両方に対して緊密な愛着を形成すると考えられている。

一方、ある事情によって愛着対象者から分離された子どもは、基本的感情の形成に負の影響を与え、長期に渡るトラウマ体験となる恐れがあると考えられる。さらに、離婚後に母親自身が子育てに関する精神的葛藤・経済的不安といった悩みを抱え、その結果、自らに対して自信を喪失してしまうという事例が起こっている。

以上の点を踏まえ、本研究では母親の自尊感情及び家庭環境と親子関係の質について検討することを目的とする。

【方法】

(1) 対象者

対象は、関東地方の保険会社に勤務をし、現在子育てをしている女性を対象に調査を行った。215名に質問紙を配布し、125名から回答を得た(58.1%)。その内、有効回答とされた118名を最終的に分析対象とした(54.9%)。平均年齢は、36.97歳(範囲：24歳～50歳,$SD = 6.00$)であった。

(2) 調査時期

質問紙の配布期間及び回収期間は、20XX年10月であった。配布については、保険会社に依頼し、回収は随時行った。

(3) 質問紙構成

質問紙は、①「フェイスシート」、②「母親の自尊感情について」、③「親子関係の質について」から構成され、無記名により回答を求めた。

①フェイスシート

自身の年齢と性別、同居している家族の構成、子どもの人数と年齢と性別。

②母親の自尊感情について

Rosenberg(1965)の自尊感情尺度を日本語

Table 1　子どもの人数

子どもの数	度数	(%)
1人	22	18%
2人	59	49%
3人	31	26%
4人以上	8	7%
合計	120	100%

訳した、山本ら(1982)による自尊感情尺度を使用した。この尺度は、自己について全般的にどのように捉えているのかを測るための尺度である。回答については「とてもそう思う」、「そう思う」、「そう思わない」、「まったくそう思わない」の4件法。

③親子関係の質について

田邊・米澤(2009)が作成した、あるがままの子どもとの関係についての尺度、26項目を参考に用い、筆者により再構成をし、新たに40項目を作成をした。回答は「とてもあてはまる」、「あてはまる」、「どちらともいえない」、「あてはまらない」、「まったくあてはまらない」の5件法。

【結果】

(1) 調査対象者の属性

関東地方の保険会社に勤務をし、現在子育てを行っている女性を対象とした調査を行い、125名の回答を得、うち男性が5名、女性が120名であった。ただし、今回の研究において、男性は対象としないため、女性の回答を有効とした。

さらに女性の全120名の回答のうち、対象年齢外のデータが存在したため、それらを除く118の回答(94.4%)を最終的に分析の対象とした。

Table 2　配偶者の有無

配偶者	度数	(%)
有	94	78%
無	26	22%
合計	120	100%

母親118名の平均年齢は36.97歳、範囲は24歳から50歳($SD=6.00$)、子ども276名の平均年齢は8.00歳、範囲は0歳から26歳であった。

(2) 子どもの人数および配偶者の有無

今回の対象者の子どもの数を調べてみたところ、2人が最も多く(49%)、次いで3人、1人、4人以上の順であった(Table 1)。

配偶者の有無については、「有り」が94人(78%)であり、「無し」が26人(22%)であった(Table 2)。

(3) 親子関係に関する質問紙調査の因子分析の結果

親子関係において、母親が子どもとの関わりに対し、どのように感じているかについて回答を5件法にて求めた。これらの親子関係における子どもとの関わりに関する40項目について、探索因子分析(主因子法)を実施し、スクリープロットにより、固有値の減衰状況を確認したところ、3因子が妥当であると判断された。そこで因子数を3に固定し、因子分析を実施した(主因子法、プロマックス回転)。2つ以上の因子に.35以上の負荷量を示す項目、どの因子にも.35未満の負荷量しか

示さない項目を除外し、再度因子分析を行い、最終的に３因子30項目を採用した。なお回転前の３因子30項目で全分散を説明する割合は45.2%であった。それぞれの因子の信頼度を確かめるためCronbachのα係数を求めたところ３因子とも.75以上の値を示し、信頼度が高いことが確認された。

第１因子に負荷量の高い項目は、「私は、子どもの悩みを聞いてあげたいが、子どもは向き合ってくれない」(.866)、「私は、子どもの考えていることが分からない」(.728)、「私は、子どもと共に過ごす時間を持つことは、とても大切だと考えている」(-.712)であった。これは母親から子どもへの愛情の絆を形成できていないことを意味しているが、その他の項目として「子どもは、誰よりも私のことも信頼していると思う」(-.696)、「子どもは、誰よりも私のことが好きだと思う」(-.678)、「子どもは、私が喜ぶようなことを考えてくれる」(-.658)と、子ども側から親への愛情の絆が形成していると感じられないことを意味している。したがって、この因子は、母親と子どもの関係の中で、互いが親子の情愛の絆、すなわち愛着が形成されていないことを意味すると解釈された。そこで、この因子は「愛着の未形成」因子と命名した。なお項目を解釈する際、「私は、子育ての悩みを相談する人がいない」という項目が含まれていたが、因子の特徴から外れているためこの項目を除外した。

第２因子に負荷量の高い項目は、「私と子どもは、話し合いをすると、喧嘩になってしまうことが多い」(.670)、「私は、子育てにおいて、不安になるときが多い」(.581)、「子どもは、自分中心に物事を考えたり、行動する傾向がある」(.569)などとなっており、親子関係において何とかうまくやりたいと考えているが、自分中心に考えてしまったり、逆に子どもが自分中心に見えたりして不安になるという葛藤の様子が見て取れる。そこでこの因子は「母子間の葛藤」因子と命名した。

第３因子に負荷量の高い項目は、「私は、子どものことを信頼できる」(.645)、「私は、子どもの意思を尊重するようにしている」(.627)、「私は、子どもの有るがままが大好きである」(.581)などであり、すべての項目で母親が子どもに対して、信頼感をもっており、子どもを尊重し、子どもの事を親としてしっかり考えていることを示す項目が並んでいる。つまり子どもと安定した関係で向き合うことができており、この因子を「安定した母子関係」因子と命名した。

このように、親子関係における子どもとの関わりへの意識に関する項目は、「愛着の未形成」、「母子間の葛藤」、「安定した母子関係」の各因子から構成されていることが明らかとなった。その結果をTable 3に示した。

(4) 配偶者の有無による自尊感情尺度のt検定の結果

Rosenberg(1965)の自尊感情尺度を日本語訳した、山本ら(1982)による自尊感情尺度、10項目について、配偶者の有る母

Table 3　親子関係における子どもとの関わり尺度の因子分析（主因子法・promax回転,n=118）

項目番号	項目内容	因子1	因子2	因子3
第１因子：愛着の未形成（15項目：α＝.91）				
29	私は、子どもの悩みを聞いてあげたいが、子どもは向き合ってくれない	**.866**	.017	.159
14	私は、子どもの考えていることが分からない	**.728**	.135	.039
07	私は、子どもと共に過ごす時間を持つことは、とても大切だと考えている(R)	**-.712**	.166	.211
03	子どもは、誰よりも私のことを信頼していると思う（R）	**-.696**	.065	.017
01	子どもは、誰よりも私のことが好きだと思う（R）	**-.678**	.047	-.038
09	子どもは、私の喜ぶようなことを考えてくれる（R）	**-.658**	.267	.119
30	子どもが間違ったことをしたとき、本当はどうしたらよかったのかを話し合う(R)	**-.588**	.112	.116
20	私は、子どもを好きなのに、子どもは私を嫌っていると感じる	**.583**	.232	.048
33	子どもは、いつも私の機嫌を窺って行動しているように感じる	**.570**	.202	.096
26	子どもは、私の忠言等に対し、受容的な態度や関心も示さない	**.568**	.260	.078
18	子どもは、私との約束や決まり事を頻繁に無視する	**.551**	.226	-.054
36	私は、いつも子どもの機嫌を損ねないように生活している	**.531**	.003	.132
05	私は、子どもが不安に駆られたとき、傍に居てあげるようにしている(R)	**-.519**	.133	.313
06	子どもは、私との関わりを避けているように感じる	**.480**	.234	.237
27	私は、子どもに対し、あまり期待を持っていない	**.440**	-.048	-.162
第２因子：母子間の葛藤（８項目：α＝.76）				
37	私と子どもは、話し合いをすると、喧嘩になってしまうことが多い	-.237	**.670**	-.125
08	私は、子育てにおいて、不安になることが多い	-.052	**.581**	-.008
24	子どもは、自分中心に物事を考えたり、行動する傾向がある	.129	**.569**	.061
39	私は、子どもとの約束や決まりごとを、つい忘れてしまうことがある	-.151	**.487**	-.306
31	私は、仕事等に関するいらだちを、子どもにぶつけてしまうときがある	.046	**.462**	-.068
16	子どもは、しばしばあからさまな嘘をつく	-.059	**.432**	.021
12	私は、子どもを叱るとき、つい感情的になってしまう	-.016	**.425**	-.162
32	私は、子どもとの関わりを意識的に避けてしまうときがある	.244	**.381**	-.128
第３因子：安定した母子関係（６項目：α＝.79）				
21	私は、子どものことを信頼できる	-.211	.028	**.645**
40	私は、子どもの意思を尊重するようにしている	.049	-.004	**.627**
19	私は、子どもの有るがままが大好きである	.023	-.157	**.581**
15	私は、子どもの悩みに対し、きちんと向き合うようにしている	.064	-.200	**.580**
23	私は、子どもと一緒にいて幸せだ	-.257	.013	**.529**
13	私は、子どもの話にしっかりと耳を傾けるようにしている	.162	-.071	**.494**
	因子間相関　因子２	.468		
	因子３	-.542	-.417	

注：（R）は逆転項目

親と無い母親に分け、平均値の差の検定（*t*検定）を行った。配偶者の有無に関する度数、平均値、標準偏差、*t*値を算出し、その結果をTable 4に示した。

*t*検定の結果、「自尊感情尺度」は、配偶者の無い母親の平均値が25.46（*SD*=4.18）、配偶者の有る母親の平均値が28.26（*SD*=3.54）、$t(116)=-3.33, p<.001$であった。したがって、「自尊感情尺度」では、配偶者のいない母親の方が配偶者のいる母親に比べて、自尊感情が低いことが明らかになった。

(5) 配偶者の有無による親子関係尺度の*t*検定の結果

因子分析の結果得られた３因子「愛着の未形成」得点、「母子間の葛藤」得点、「安定した母子関係」得点を従属変数に、配偶者の有無を独立変数にした*t*検定を行った（Table 5）。

*t*検定の結果、「愛着の未形成」得点は、配偶者のいない母親の平均値が40.54（*SD*=12.79）、配偶者のいる母親の平均値が29.63（*SD*=6.43）、$t(116)=5.89, p<.001$であり、0.1%水準で有意差が認められ、配偶者がいない方が、配偶者がいる者より「愛着の未形成」得点が有意に高いことがあきらかになった。

「母子間の葛藤」得点においては、配偶者のいない母親の平均値が25.08（*SD*=3.57）、配偶者のいる母親の平均値が23.32（*SD*=5.21）、$t(116)=1.56, p=.12$であり有意差は認められなかった。

また、「安定した母子関係」得点では、配偶者のいない母親の平均値が22.96（*SD*=3.44）、配偶者のいる母親の平均値が25.05（*SD*=2.88、$t(116)=-3.05, p<.01$であり、１％水準で有意差が認められ、配偶者がいない母親は、配偶者がいる母親よりも「安定した母子関係」得点が低いことが統計的に明らかになった。

Table 4　配偶者の有無による自尊感情尺度の*t*検定の結果

	配偶者の有無	度数	平均値	標準偏差	*t*値
自尊感情尺度	無	24	25.46	4.18	-3.33***
	有	94	28.26	3.54	

***$p<.001$

Table 5　配偶者の有無による親子関係尺度の*t*検定の結果

	配偶者の有無	度数	平均値	標準偏差	*t*値
愛着の未形成	無	24	40.54	12.79	5.89***
	有	94	29.63	6.43	
母子間の葛藤	無	24	25.08	3.57	1.56 n.s.
	有	94	23.32	5.21	
安定した母子関係	無	24	22.96	3.44	-3.05 **
	有	94	25.05	2.88	

**$<p.01$, ***$p<.001$

Table 6　自尊感情得点高低による親子関係尺度の*t*検定の結果

	自尊感情得点	度数	平均値	標準偏差	*t*値
愛着の未形成	低	35	36.37	10.71	3.99***
	高	36	27.61	7.55	
母子間の葛藤	低	35	25.40	4.49	3.72***
	高	36	21.42	4.52	
安定した母子関係	低	35	23.60	3.62	-2.10 *
	高	36	25.28	3.11	

*<*p*.05, **<*p*.01, ***p<.001

(6) 自尊感情の高低による親子関係尺度のt検定の結果

「自尊感情」得点の平均点±1/2標準偏差により「自尊感情」低群(n=35)と「自尊感情」高群(n=36)に分け、これを独立変数とし、因子分析により得られた3因子得点を従属変数として*t*検定を行った(Table 6)。

*t*検定の結果、「愛着の未形成」得点は、自尊感情低群の平均値が36.37(SD=10.71)、自尊感情高群の平均値が27.61 (SD = 7.55)、$t(69)=3.99$, $p<.001$であり、0.1%水準で有意差が認められ、自尊感情低群は自尊感情高群よりも「愛着の未形成」得点が有意に高いことが明らかになった。

「母子間の葛藤」得点においては、自尊感情低群の平均値が25.40(SD=4.49)、自尊感情高群の平均値が21.42(SD = 4.52)、$t(69)=3.72$, $p<.001$であり、0.1%水準で有意差が認められた。これにより自尊感情低群は自尊感情高群よりも「母子間の葛藤」得点が有意に高いことが示された。

また、「安定した母子関係」得点では、自尊感情低群の平均値が23.60(SD=3.62)、自尊感情高群の平均値が25.28(SD=3.11)、$t(69)=-2.10$, $p<.05$であり、5%水準で有意差が認められ、自尊感情低群は自尊感情高群よりも「安定した母子関係」得点が有意に低いことが明らかになった。

【考察】

(1) 配偶者の存在の自尊感情への影響

配偶者の有無による自尊感情の差がみられるかについて分析を行ったところ、配偶者がいる母親の方が、配偶者がいない母親よりも自尊感情が高いことが示された。

これらの結果については従来の研究結果を支持するものであり(例えば、古荘, 2009；初塚, 2010)、家庭環境が母親自身の自尊感情への影響の大きさが示された結果となった。配偶者がいるということが母親自身の生活も安心して考えることができ、自分自身に対する肯定的な感情を抱きやすいと解釈できる。逆に母子家庭である場合の母親は自尊感情が低いことが明らかになったため、育児に対する影響は計り知れないと考えられ、行政等の支援の在り方について考えさせられる結果となった。母親の自身感情は子どもの自尊感情が育つことにも影響が大きいため、母親自身だけでなく、子どもを育

てるという意味でも母子家庭に対する心理面でのサポートを教育機関などがしっかりと対策を考えていく必要があろう。

(2) 配偶者の存在の親子関係への影響について

親子関係の質問項目を因子分析行った結果、「愛着の未形成」因子、「母子間の葛藤」因子、「安定した母子関係」因子の３因子が抽出された。これらの因子得点を配偶者の有無で比較したところ、「愛着の未形成」得点と「安定した母子関係」得点とで統計学的に有意な差が見られた。すなわち配偶者がいる母親の方が、子どもとの愛着関係を形成することができており、安定した母子関係であることが示された。配偶者がいない母親は子どもに対して、なかなか理解することができないし、子どもと過ごす時間を大切に思えないなど、愛情の絆を結ぶことができていない。加えて子どもも母親に対して信頼していないようだ、好きでないようだなど、自分から子どもに対する愛着、子どもから自分への愛着の双方向を実感することができていないことが明らかになった。反対に配偶者がいる母親は子どもとの安定した関係を築き、愛情を注ぐことができていると解釈できる。母子関係が安定するためには母親の存在だけでなく、父親の存在も間接的には大きな影響を与えていることが明らかになった。一方「母子間の葛藤」得点では、配偶者の有無では有意な差が見られなかったわけであるが、この因子は母親が子どもの事を思っているにも関わらず、つい子どもとの関係を悪化させてしまうという母親の葛藤を意味する因子であり、これらには配偶者の有無は関係がなく、母子関係に起因するものであると考えられる。特に、思春期などはどうしても母親との関係は悪化し、子どもと険悪な関係を経験をすることが少なくない。このような葛藤は、父親がいてもいなくても同じように経験すると解釈できる。

(3) 母親の自尊感情が親子関係に与える影響

母親の自尊感情得点を高い群と低い群の２群に分け、親子関係に関する３因子得点でどのような差があるのかについて分析を行ったところ、３因子すべてに統計学的に有意な差が見られた。

「愛着の未形成」得点では、母親の自尊感情が低い群が、高い群に比べて有意に高いという結果が得られた。すなわち、母親の自尊感情が低ければ、子どもとの愛着関係の形成ができておらず、逆に母親の自尊感情が高ければ、子どもとの愛着形成ができていると解釈できる。これは多くの先行研究が示した知見をきれいに示した結果となった（例えば、米澤，2009；田邊・米澤，2009；加藤・中島，2011）。母親の自尊感情は、子どもとの母子関係に大きく関係していると考えられる。

「母子間の葛藤」得点においても、母親の自尊感情が低い群が高い群に比べて、得点が有意に高いという結果が得られた。

これを言い換えるならば母親の自尊感情が低いと、母子関係において葛藤を抱える経験が多く、逆に自尊感情が高ければ葛藤を抱える経験が少ないと解釈することができる。母親として子どもと向き合う時に、自分自身に自信を持つという自尊感情が高ければ、自分の子育て自体にも自信を持つことができており、子どもとの関係において葛藤を経験することなく接することができると考えられる。すなわち自尊感情は、母親が子どもと向き合う時の態度にも影響していることが示されたと解釈できる。

さらに「安定した母子関係」得点では、母親の自尊感情高群が低群に比べて、統計的に有意に高いという結果が得られた。これは、自尊感情が高ければ、子どもと安定した母子関係が結ぶことができているということを示す結果である。母親の自尊感情が高ければ、子どもの存在を認め、尊重し、理解しようと努力し、子どもの有るがままを認めようとする傾向があるということである。これは母親としての在り方として望ましい姿であると考えられ、自尊感情を持つことは、望ましい母親の特性を持つことにつながると解釈できる。

(4) 仮説の検証

本研究で仮説として挙げた「家庭環境から見た愛着形成について」、配偶者の有無による違いについて検討を行った。調査の結果、配偶者の有無によって自尊感情得点に差が見られた。すなわち、配偶者がいる母親の方が配偶者のいない母親よりも自尊感情が高いという結果であった。さらに、配偶者の有無が親子関係の質にも影響があることが明らかになった。配偶者がいる母親の方が、子どもとの愛着関係が形成できており、安定した子どもとの関係を形成できていることが明らかになった。今回の研究では、配偶者の有無という家庭環境が、母子関係の質に対して大きな影響があることが示唆された。

次に「母親の自尊感情と子どもとの関連について」、母親の自尊感情得点をもとに親子関係の質について検討を行ったところ、今回調査した親子関係の質に関してすべてに影響があることが示された。すなわち、母親の自尊感情が低ければ、愛着関係が未形成で、母子関係に葛藤を抱えており、子どもとの安定した関係が形成できていないことが明らかになった。いずれの結果としても、母親の自尊感情を高めることが大切であり、子どもが良好な発達をしていくためには母親の自尊感情が大きく関係していることが明らかになった。

(5) 今後の課題と本研究の限界

本研究の限界及び課題としては、以下の三点に集約される。第一に、家庭環境の指数として配偶者の有無のみしか扱えなかった点である。家庭環境として両親がそろっていたとしても、さらにその質的な内容として父親が育児に協力的であるかなどの要因が大きく関係していると

考えられる。さらには、同居の祖父母からの協力が得られているのか等、たとえ配偶者がいない場合でも、その代わりとなる存在がどのように影響を与えているのかについて精査していくことが今後の課題である。

第二に、自尊感情における母親と子どもの相関関係に関する調査の不備である。本研究では、母親側の自尊感情尺度の調査を行ったが、子どもを対象とした調査を行わなかったため、その相関関係を明確にできなかった。母親の自尊感情がどのように子どもに影響を与えているのか、子ども側の変数を得ることができなかった。母親の自尊感情は子どもの自尊感情に相関があるのか、母親の自尊感情は子どもの様々な発達課題をクリアすることにどのような影響があるのか等を調査していくことが今後の課題であると思われる。愛着の問題を考えるならば、特に乳幼児期の母親との関係がその後の人生にどのような影響を与えているのかについても調査していくことに意味があると考えられる。

第三に、父親との愛着関係やその他のきょうだいとの愛着関係が、子どもの成長にどのような影響を与えているのかについて検討することである。今回の調査では、母子関係に限定して調査を行った。逆に、父子関係に限定したならばどのような結果になったのであろうか。または祖父母に育てられている子どもであるならばどのような結果が得られるのか、きょうだいによる影響は、母子関係や父子関係を補完しうるのかなどの検討の課題が残っている。

いずれにしても、愛着の問題はとても広く深い分野であり、今後も先に述べた点で発展した研究を行い、子どもの健やかなる生育環境が明らかになるような研究が望まれる。

本論文は、第２筆者である大塚周が、2013年に作新学院大学に提出した卒業論文の一部を、再度統計分析し直し、加筆修正したものである。

【引用文献】

Amato, P. R.　1994　Life-span adjustment of children to their parents' divorce. *Children and Divorce*　**4(1)** 143-164.

古荘純一　2009　日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか　光文社新書

初塚眞喜子　2010　アタッチメント（愛着）理論から考える - 保育所保育のあり方　相愛大学人間発達学研究　**1**　1-16

加藤悠・中島美那　2011　母親の自尊感情と養育態度　茨城キリスト教大学紀要　**45**　119-129

近藤卓　2011　いのちの教育に必要なこと（教育家庭新聞記事　2011年3月19日）

厚生労働省　2012　平成24年度人口動態統計（確定数）の概況

Lamb, M.E.　1979　Paternal Influences and the Father's Role. A Personal Perspectives. *American psychologist*　**34** 938-943

中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕二　1999　心理学辞典　有斐閣ブックス

中間玲子・小塩真司　2007　自尊感情の変動性における日常の出来事と自己の問題　福島大学研究年報　**3**　1-10

根本橘夫　2007　なぜ自信が持てないのか—自己価値観の心理学　PHP新書

Prior, V. & Glaser, D. 2006　*Understanding Attachment and Attachment Disorders: Theory, Evidence and Practice*（加藤和生訳　2008　愛着と愛着障害　北大路書房）

李和貞　2006　青年の父・母へのアタッチメン

ト表象と自尊感情の関係　早稲田大学教育学部　学術研究　（教育心理学編）　**54**　35-45
Rosenberg, M. 1965 *Society and adolescent selfimage.* Prinston Univ. Press.
田邊恭子・米澤好史　2009　母親の子育て観から見た母子の愛着形成と世代間伝達　和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 **19**　19-28
棚瀬一代　2004　離婚の子どもに与える影響―事例分析を通して　現代社会研究（京都女子大学）　**6**　19-37
棚瀬一代　2009　高葛藤離婚において子どもが別居親から疎外されていくプロセス　心理相談室研究紀要（神戸親和女子大学心理・教育相談室）　**7**　3-10
産経新聞　2009　都教委、小学生に“自尊教育”中高生の半数「自分に否定的」（2009年3月11日付）
山本真理子・松井　豊・山城由紀子 1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究 **30**　64-68
友利久子・嘉数朝子・大城一子　2004　子どもの自尊感情の発達と親子のコミュニケーションスタイル--米国の育児書の紹介　琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要　**6**　111-133